

110号

2013. 10 発行

この原稿を書き始めた日は、十月の中旬ですが30度の気温が続き驚いて、一度しまった夏ズボンを出して履いていました。筆が進まずにいたところ、関東直撃の台風がありました。最近の気象状態は本当に乱暴ですね。

しかし、秋の気配は着実に近づいており、これからは、観光やスポーツの季節になります。この時期には、高熱の出る風邪症状の患者さんが多く来院されています。

風邪といえばやはり咳が辛いですね。私たち医師には、多くの学会誌や商業誌が届けられますが、その内容に長引く咳、治らない咳の特集が多くなったのは、この数年です。

当医院の外来でも長引く咳で困っている患者さんが増えた印象があります。咳の原因は多種多様ですが、感染性のものは多くが発熱を伴います。その他、アレルギー性鼻炎や後鼻漏症候群などの耳鼻科疾患、喘息の発症、胃酸の逆流症による咳、喫煙による咳などがあります。見逃してはならない原因として、結核や肺がんがあります。

新宿では若者を中心に新規の結核患者さんがいます。また、特に喫煙者の方は肺がんの発症を疑って診察にいらっしゃいます。長引く咳に対する治療も、問診と検査により原因を同定する事が重要ですが、原因が多彩の事も多く治療に難渋しますので根気が必要です。



ところで、私は三年前より右の臀部から大腿部にかけて痛みやしびれを自覚していました。

腰の椎間板ヘルニアに伴う坐骨神経痛と自己診断していましたが、鎮痛剤を適時内服し経過を見ていました。しかし、改善不良のため先日MRI検査を受けたところ、やはり椎間板ヘルニアでした。私は体重が重い割には運動が好きで、また長い時間座っていることも症状が改善しない理由と思っています。

椎間板ヘルニア以外で中年の腰の病気の代表といえば腰部脊柱管狭窄症です。仰々しい名前ですが、やはり腰痛、下肢の痛み、しびれなどの症状があります。特徴的な症状は、歩くと症状が悪化し立ち止まって休むと楽になりまた歩行ができる事(間歇性跛行)です。

いずれの病気に対しても内服治療を主体とした保存的治療が主体です。椎間板ヘルニアに対しては牽引療法、脊柱管狭窄症に対しては、点滴治療を行う事もあります。神経障害が強い場合や改善不良の場合にはブロック治療、手術を考慮して専門医療機関へご紹介しています。

10月は、一年に一度来院される健康診断やインフルエンザワクチン接種希望の方とお会いできる月でもあります。冬に向かって病気や怪我をせず元気でありますようにご注意ください。

院長 

伊藤外科内科医院 HP

<http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)

三弓先生の本棚 36



番外一旅編 お伊勢まいり

10月2日夜8時、伊勢神宮の内宮では「遷御（せんぎょ）の儀」という大祭が行われた。これは20年に一度の式年遷宮のクライマックスで、テレビでもずいぶん報道されていたので、ご存知の方も多いと思う。「遷宮」とはお宮を新しくすることで、「遷御」は新しいお宮に神様にお遷りいただく儀式。つまり、伊勢神宮の内宮にお鎮まりになっている皇祖神・天照御神がこの日、新しいお宮にお引っ越しされたというわけである。実はこの遷御の取材のために、前日から伊勢神宮に行ってきた。

2日の午後1時、旧神領民である地元の人や各地からの参拝者を前にして、宇治橋が封鎖された。この時刻から先、境内に入れるのは、遷御の奉拝に特別に招待された3000名だけである。いったい、どんな方々が招待されているのかと思ったが、その多くは全国の神社関係者、そして旧神領民の代表者、旧皇族などのやんごとなき方々などなどだそうで。ちなみに小さな雑誌の取材記者である私などがいた場所は、神様のお宮からはずいぶん離れた神楽殿の前。午後5時過ぎからはじまる儀式のために、神楽殿前のカメラマンや記者たちは2時間以上その場で立ちん坊。その前を招待された多くの方々が通られたが、そのなかに91歳になった日本学者のドナルド・キーンさんのお元気な姿を発見した。

夜の帳が神宮の森にも広がり始めた頃、三鼓という太鼓の音を合図に、遷御の儀に奉仕する神職の参進が神楽殿の前を進む。その人数150名。玉砂利を踏むシャリシャリという音と虫の音だけが響き渡る。「浄暗」と呼ばれる神宮の神域の闇がそこまで近づいていた――。

と、ここまでで、実は神楽殿前の報道陣は、肝心の遷御の儀の前に、そこから撤収させられてしまいました。嗚呼、神宮の浄暗の中にさえいさせてもらえれば、なにがしか感じ入るところもあったかもしれないのに……。私は今一度、お宮の方角に深々と頭を垂れ、テレビでニュース映像を見ようと、そそくさと宿に戻った次第だったのでした。

それでも、今回、いろいろな収穫があったのだが、その最たるものは、当日の夜10時から放送されたNHK三重の遷御の特番である（関東では放送されなかったらしい）。奉拝特別席に参列した女優の常盤貴子さんが出演したのだが、彼女は天照大御神のご神体をお遷りする「遷御の儀」その時の様子を、開口一番、こう言った。「真っ暗でなにも見えませんでした」。その後、彼女は、見えないからこそ、五感の感度を目一杯上げて気配として感じたことを言葉で表現してくれたのだが、先の第一声は見事だった。そう、私たちがテレビで観た映像は、NHKが誇る高感度カメラでの映像。つまり、その状況下で人の目には映ることのないものを高感度カメラを通して見ていたのだ。人は、見れない（見てはいけない）ものを、見てみたくなる生き物である。それでも、生身の人間が五感で観たものと、カメラが見たものの意味は違うのではないだろうか。私は常盤貴子さんのコメントを聞きながら、「真実と事実」という言葉を思い出した。